

【研究報告】

渡来系氏族を素材とした歴史教育の可能性

柿沼 亮介

キーワード：渡来人、帰化人、百済王氏、高麗王、桓武天皇、高野新笠、「ゆかり」発言、中華思想

【要 旨】「渡来人」「帰化人」については、古代の日本において先進的な文物をもたらした人々であるというイメージは強いものの、政治的にどのような役割を果たしたのか、またその後どうなったのかということについて歴史教育で触れられることは少ない。しかし、「渡来人」「帰化人」のどちらの用語が適切かという論争において問題とされるように、渡来してきた人々が、集権的な統一国家の存在を前提として帰化し、定住して世代を追っていくというのが渡来系の人々のあり方であり、日本における中華思想との関係性は、渡来系の人々を理解する上で必須である。また、渡来系の人々について、「外国人」であるとの誤解もよくみられる。しかし、古代のヒトの移動を近代国家の枠組みで捉えるべきではなく、また関見の著名な言葉に、「われわれの祖先が帰化人を同化したというような言い方がよく行われるけれども、そうではなくて、帰化人はわれわれの祖先なのである。彼らのした仕事は、日本人のためにした仕事ではなくて、日本人がしたことなのである。」とあるように、渡来系の人々はともに日本社会を形成していった、現代日本人の祖先である。そのことを表しているのが、天皇の「ゆかり」発言であるといえる。以上のような点に留意して渡来系氏族を素材とする授業を行う場合、次のような内容が考えられる。①百済王氏などを利用して古代国家が小中華意識を継続したというところから、古代国家の帝国性を考察する。②天智系の光仁天皇を父に、百済系の渡来系氏族出身の高野新笠を母に持つ桓武天皇が「新王朝」を意識したことを考察する。③桓武天皇は百済王氏を「朕が外戚」としたことで、日本と百済の両方の王権を受け継ぐことを企図したことを考察する。④渡来系の人々はなぜ現代日本人の祖先であるといえるのかを考察する。

はじめに

イタリアの中のドイツ語圏であるトレンティーノ・アルト・アディジェ自治州の県都ボルツァーノに所在する南ティロル考古学博物館の特別展“Lost & Found”展¹は、15世紀～16世紀初頭に活躍した人文主義者コンラート・ツェルティス²による次のような一文をプロローグとして掲げる。

“It’s a shame not to know Greek and Roman history, but it’s far more disgraceful not to know the situation of our own country -its stars, its rivers and mountains, its antiquities, its peoples...”

統一国家形成に先立ってドイツ語という共通語を共有するネイション（ナツィオン＝「民族」）が形成されていく時期³に、ギリシア・ローマの文化を教養の基層としつつも、郷土の歴史、文化、自然、社会への関心が高まってきたことを端的に表している。

本特別展は、‘Archaeology in South Tyrol before 1919’を副題とし、18～19世紀にナショナルリズ

ムの盛り上がりによって地元の博物館建設や考古学研究が進展したものの、法の未整備により出土品が地域外に流出してしまったことや、第一次世界大戦で紛争地域になり、戦後はイタリア領となるという南ティロルの苦難の歴史を解説するものである。すなわち、1919年のサンジェルマン条約によるオーストリア＝ハンガリー帝国からイタリアへの割譲に至るこの地域の歴史を、南ティロルの視点から描いているのが特徴である。

この文は、近世以降に形成されていった「ナツィオン」の意識から郷土南ティロルへの関心が高まったことを表すための掲げられており、この地域の歴史や展示の仕方を踏まえると、‘our own country’に持たせている意味はあくまで南ティロルであると考えられる。現代の国境によって隔てられる国家の枠組みによって解釈し、「南ティロルはドイツなのか？オーストリアなのか？イタリアなのか？」という問いを立てることは、南ティロルについて理解する上では極めて不十分であり、かつ歴史学的にも意味のある態度ではない。⁴

さらに、ヨーロッパ世界における普遍的な古典ともいえるべきギリシア・ローマと‘our own country’を対置させつつ、ギリシア・ローマの歴史は当然知っておくべきものとしている点も注目される。つまり、ギリシア・ローマの歴史は、現代のギリシア人やイタリア人だけのものではなく、自分たちの歴史でもあるということである。

翻って、昨今の社会状況を考えてみたい。

インターネット上には在日外国人や特別永住者への差別的な発言が溢れ、沖縄へのヘイトスピーチともいえる批判がなされている。ここでは人権問題とは別に歴史的な観点から考えるが、これらの主張の問題点は、日本を単一民族国家として捉えて「同じ歴史を共有する同質的な日本人」なるものが存在することを前提とし、歴史的に様々な経緯で日本列島の住民となった多様な人々の存在を認めないところにある。

また2019年、平成から令和への改元に際して、初めて「日本の古典」を典拠とする元号が選ばれたという言説が展開された。これまで「中国の古典」である四書五経や正史などの漢籍を典拠としていた元号の選定において、「日本の古典」である『万葉集』から選ばれた⁵ことについて、メディアにおいて好意的な見方で紹介されることが多かった。

しかし漢籍は、「東アジア世界⁶」における共通の古典として機能し、江戸時代には寺子屋において庶民も学ぶ教材であった。現代日本語においても、漢籍由来の熟語や故事成語などは多く用いられる。「まほろば」の大和言葉だけで日本語や日本文化は形成されているわけではない。さらに漢籍の知識は「東アジア世界」における共通の教養であり、中国以外の国々の間でも漢詩を通じた交流が古代から行われてきた⁷。

こうした視点に立つと、近代国家である中華人民共和国や日本の境界を、古典の世界に遡及させて「中国の古典」「日本の古典」と分けることは、歴史的な態度であるようには思われえないのである。

このように、近代国家の枠組みについての強固な思い込みや、それを歴史上の出来事にまで無自覚に当てはめる風潮が蔓延する中で、歴史教育には何が可能であるか。この点について本稿では、渡来系氏族の日本史上の位置づけや歴史教育における扱い方を通して検討していきたい。

1. 天皇の「ゆかり」発言と桓武朝

①「新王朝」としての桓武朝

桓武朝について『詳説日本史B 改訂版』（山川出版社）は、以下のように記述する。

光仁天皇は、行財政の簡素化や公民の負担軽減などの政治再建政策につとめた。やがて781（天応元）年に亡くなる直前、天皇と渡来系氏族の血を引く高野新笠とのあいだに生まれた桓武天皇が即位した。

さらにこれに続いて、長岡京・平城京への遷都や蝦夷征討事業、勘解由使の設置、健甕などの桓武朝の諸政策と、徳政相論による「軍事」と「造作」の停止について述べる。

桓武天皇は、天智天皇の孫にあたる光仁天皇を父に、百済系の渡来系氏族出身の高野新笠⁸を母に持ち、しかも聖武天皇の第一皇女であった井上内親王と光仁との間に生まれた皇太子他戸親王が廃されたことで皇太子となったため、桓武の即位によって天武系から天智系へと皇統が転換したとされる。そのため桓武は「新しい王朝」を意識したと考えられており⁹、平城京から長岡京・平安京への遷都や、蝦夷征討事業の展開などの桓武朝の諸政策もその文脈で理解される。

また、渡来系の母を持つことから渡来系氏族出身者を重用し、特に百済系の渡来系氏族を代表する一族である百済王氏を「朕が外戚」とであると表明し¹⁰、様々な特権を付与した¹¹。

こうしたことから吉川真司は、桓武天皇は「自分は父方は日本天皇家、母方は百済王家の血を受けたインターナショナルな君主だと言挙げた」とする¹²。

②天皇の「ゆかり」発言を活用した授業における問題

授業においても、このような桓武朝の特徴を踏まえた上で教科書に見えるような諸政策を理解させる必要がある。そこで生徒の関心を喚起するために活用できるのが、天皇の「ゆかり」発言である。

これは2001年12月に当時の天皇（現上皇）が、誕生日に先立っての記者会見で述べた以下のようである¹³。

記者の問い

世界的なイベントであるサッカーのワールドカップが来年、日本と韓国の共同開催で行われます。開催が近づくにつれ、両国の市民レベルの交流も活発化していますが、歴史的、地理的にも近い国である韓国に対し、陛下が持っておられる関心、思いなどをお聞かせください。

天皇の発言

日本と韓国との人々の間には、古くから深い交流があったことは、日本書紀などに詳しく記されています。韓国から移住した人々や、招へいされた人々によって、様々な文化や技術が伝えられました。宮内庁楽部の楽師の中には、当時の移住者の子孫で、代々楽師を務め、今も折々に雅楽を演奏している人がいます。こうした文化や技術が、日本の人々の熱意と韓国の人々の友好的態度によって日本にもたらされたことは、幸いなことだったと思います。日本のその後の発展に、大きく寄与したことを思っています。私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると、続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感

じています。武寧王は日本との関係が深く、この時以来、日本に五経博士が代々招へいされるようになりました。また、武寧王の子、聖明王は、日本に仏教を伝えたことで知られております。

しかし、残念なことに、韓国との交流は、このような交流ばかりではありませんでした。このことを、私どもは忘れてはならないと思います。

ワールドカップを控え、両国民の交流が盛んになってきていますが、それが良い方向に向かうためには、両国の人々が、それぞれの国が歩んできた道を、個々の出来事において正確に知ることに努め、個人個人として、互いの立場を理解していくことが大切と考えます。ワールドカップが両国民の協力により滞りなく行われ、このことを通して、両国民の間に理解と信頼感が深まることを願っております。

このうち「桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると、続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じています。」という部分について、大きな話題となった。日本では、12月23日の天皇誕生日にこの部分の内容について報じたのは朝日新聞と産経新聞のみであったが¹⁴、韓国で大々的に報じられたことについて朝日新聞、毎日新聞、産経新聞がすぐに紹介した¹⁵。さらに、金大中大統領（当時）が翌2002年1月14日に「ゆかり」発言を歓迎したことについて、各紙が報じた¹⁶。

日韓でのマスコミの反応も含めて、前近代の歴史上の出来事と近代国家との関係をどのように捉えるかを考える上で非常に興味深い問題である。

そこで、授業においてはしばしば「ゆかり」発言を紹介し、どのような意味があるかを発表・議論させているが、その際に気になるのは以下のような発言があることである。

イ) 天皇家に韓国人の血が入っていることに驚いた。

ロ) 高野新笠しか外国人の血が入っていないのなら、現代の天皇家にはほとんど韓国人の血が入っていないということではないか。

イ) は、高野新笠を外国人として捉えているところや、「韓国人」という用語の選択に問題がある。渡来系氏族は日本に渡来して「帰化」した者の子孫を含む概念¹⁷であるが、高野新笠本人は渡来第一世代ではなく、外国人とは捉えられない。また、「韓国人」というのは近代国民国家としての大韓民国の人々を指すものであり、歴史上、朝鮮半島にあった国の人々の呼称としては適切ではない。強いて言うならば、日本における地理的な呼称である「朝鮮半島」ないしは韓国における地理的な呼称である「韓半島」の「出身者を先祖に持つ」「人」とでもするべきである。¹⁸

ロ) は、まず歴史上の高野新笠以外の天皇の妃が、すべて朝鮮半島出身者の血をまったく引いていないということは考え難いことであり、さらには「純血な日本人」というものが存在すると想定しているところに問題がある。

以上のように、天皇の「ゆかり」発言をめぐる生徒の反応からは、渡来系氏族を「外国人」として捉え、またあたかも「純血な日本人」なる概念があるかのような誤解が生じやすいということが分かる。これは、近代国家の枠組みで歴史上の出来事を認識してしまうために起こる問題であるといえるだろう。

③関晃の言葉

では、渡来系氏族についてどのように捉えればよいのだろうか。ここで参考になるのが、日本古代史の泰斗である関晃の次のような言葉である。

祖先の数を計算してみればすぐわかることだが、現代のわれわれの一人一人は、すべて千数百年前に生活していた日本人のほとんど全部の血をうけていると言ってもよいほどである。だからわれわれは、誰でも古代の帰化人たちの血を一〇%や二〇%はうけていると考えなければならぬ。われわれの祖先が帰化人を同化したというような言い方がよく行われるけれども、そうではなくて、帰化人はわれわれの祖先なのである。彼らのした仕事は、日本人のためにした仕事ではなくて、日本人がしたことなのである¹⁹。

すなわち、渡来系氏族は日本社会をともに構成した人々であり、「外国人」として捉えるべきではない。当時の社会において一定の特殊性を有していたからこそ渡来系氏族として区別されるが²⁰、彼等もまた現代日本人の祖先ということになる²¹。

関のこの言葉は日本古代史研究者の間でよく知られており、しばしば引用される²²。丸山裕美子は、『岩波講座 日本歴史』において、次のように述べる。

（前略）唐帝国の衰退・滅亡の過程で、周縁の諸民族は独自の文化を形成していくことになり、それとともに「帰化人」は消えることになる。「諸蕃」「蕃国」という意識も消え、かわって「異国」意識が生じることになるのである。

グローバル化が否応なく進展する現代社会において、一国史ではない人類の歴史、グローバルヒストリーが求められているなか、「帰化人」に対する呪縛は過去のものとしてもよいのではないか。ローカルな歴史——日本列島の歴史——をグローバルな人類の歴史の中でとらえるためにも、差別的な帰化人観の克服こそが求められていると考える。

そして関の言葉を引用した上で、

半世紀以上前に帰化人研究に大きな成果を上げた関晃のこのことばを、わたしたちはもう一度よくかみしめてみる必要がある。その上で、人の移動と定住が世界規模で展開している二一世紀の社会においてなお「帰化」の語が用いられていることの問題点をこそ、考えるべきであろう。

とする²³。

さらに大津透は、『帰化人』の文庫化の際の「解説」において、次のように述べる。

一九五〇年以降の歴史学は、民族主義が高揚し民族文化が賛美されるなど、「民族」(Volk)が大きなテーマになったのだが、そこでは縄文時代以来日本「民族」が形成され、それが外来文化を吸収しながら発展してきたという単線的な議論もなされていたのである（藤間生大『日本民族の形成』岩波書店、一九五一年など）。これでは太古以来日本固有の民族が続いていたことになり、「神武以来」という戦前の愛国教育とあまり変わらない。著者が帰化人は「われわれの祖先」で、「彼らのした仕事は、日本人のためにした仕事ではなくて、日本人がしたことなのである」という名言は、日本民族の形成を具体的に考え直す意味をもち、その点でも画期的な主張だった²⁴。

このように、当時の日本列島に居住した人々と渡来系の人々を、どちらも日本社会を形成した

現代日本人の先祖として捉えることには、現代的にも大きな意義があるものであると考えられる。

2. 歴史教育における渡来系氏族の取り扱い方

①「渡来人」「帰化人」をめぐる論争

渡来系氏族について、かつては「帰化人」と呼ばれていたが、現在では「渡来人」と呼ばれることが多い。日本史Bの検定教科書においては現在、すべてで「渡来人」と表記されている²⁵ものの、どのように呼称すべきか研究者の間では議論が続けられており、未だに決着をみない²⁶。この問題は単に「帰化人」から「渡来人」へと名称が変更されたというのではなく、また教育における取り扱い方にも関わることから、まずはこの点について検討する。

「帰化」という概念は、「(1)化外の国々から、その国の王の徳治を慕い、みずから王法の圏内に投じ、王化に帰附する意味で、(2)その国の王も、一定の政治的意志にもとづいて、これを受け入れ、衣糧供給・国郡安置・編貫戸籍という内民化のための手づきを経て、その国の礼・法の秩序に帰属させるという、一連の行為ないしは現象をいう²⁷」と理解されている。そして平野邦雄は、「帰化」や「帰化人」という概念は「政治現象」であり、「渡来」または「渡来人」というような“物理的な移動”を示す言葉では歴史用語とはならないとする²⁸。また関晃は、『国史大辞典』の「帰化人」の項で、「最近では「帰化人」の語が中国で本来もっていた中華思想的な発想を嫌って、「渡来人」という新語を用いることも行われているが、日本に住みついて日本人の一部となった者という意味が含まれなくなるので、あまり適切な語とはいえない。」と述べる。

一方、「帰化」の概念は一定の支配領域と中華的思想をもつ国家＝律令国家の成立をもって発生するものであり、それを無視して「帰化人」の語を多用するのは問題がある²⁹というような主張もなされるようになった。『国史大辞典』には「帰化人」の項はあっても「渡来人」の項はなかったが、『国史大辞典』から対外関係についての項目を抽出し、一部改訂や増補した『対外関係史辞典』には関晃による「帰化人」の項に加えて、加藤謙吉による「渡来人」の項があり、次のように記されている。

古代に朝鮮半島など海外から渡来し、定住した者とその子孫を指す語。従来「帰化人」という語にかわって用いられるようになった。「帰化」は中華思想にもとづく用語で、「異国人がその国の王の徳を慕って来朝し、帰附する」ことを意味するが、①移住者の中には「帰化」以外の様々な事情で渡来した者が含まれる、②日本列島内に帰化すべき国家が確立していない段階の移住者を「帰化人」と呼ぶことは適切でない、③「帰化人」という用語には民族的な差別意識や偏見がつきまとう、と、主に以上3つの理由により、「帰化人」の語がしりぞけられ、新たに「渡来人」という呼称が定着した。ただ一方で中華思想を前提とした古代日本の支配者層の国家観に依拠すると、「帰化人」は、妥当な学術用語であるとする説や、「渡来人」の概念には定住者以外の一時的滞在者も含まれるから、逆に学術用語としてなじまないとする説などが存し、用語の是非をめぐって、いまだ意見が分かれている。

このように、「渡来人」「帰化人」とともに問題のある表現であるため、どちらを用いるかとなると、どこまで意味を拡大解釈するかということになる。「帰化人」という語を用いるのであれば、集権的な統一国家成立以前の段階に渡来した人々や、自らの意志で渡来して「王化」を慕った

(=帰化した)わけではない人々に対しても意味を拡大してこの語を適用する必要がある。一方で「渡来人」という語を用いるのであれば、この語では本来は表すことができない、中華思想に基づいて帰化した人々や、定住した子孫をも包摂するものとして意味を拡大する必要がある³⁰。

いずれにしても、「渡来人」「帰化人」をめぐる論争からは、渡来系の人々は単なる移住者ではなく、国家の存在を前提とし、中華思想とも関係する存在であるということが確認できる。

②「渡来人」についての教科書の記述

では、歴史教育において「渡来人」はどのように描かれているのだろうか。代表的な歴史教科書として、占有率が高く影響力の大きい『新編 新しい社会 歴史』（東京書籍、2016年発行）、『社会科 中学生の歴史』（帝国書院、2016年発行）、『中学社会 歴史』（教育出版、2016年発行）、『詳説 日本史B 改訂版』（山川出版社、2018年発行）、『日本史B 新訂版』（実教出版、2018年発行）、『新選 日本史B』（東京書籍、2018年発行）を検討する。

中学校の歴史の教科書のうち『新編 新しい社会 歴史』は、渡来人を古墳時代と飛鳥文化の節において、次のように記述する。

- ・朝鮮半島との交流の中で、半島から日本列島に、一族で移り住む人々が増えました。こうした渡来人は、農業用の大きなため池を造る技術のほか、高温で焼く、かたく黒っぽい土器（須恵器）や鉄製の農具、上質の絹織物を作る技術を伝えました。渡来人はまた、漢字や儒学、さらに6世紀半ばには仏教を伝えたほか、朝廷の記録や財政に当たったり、外国への手紙を作ったりするなど、さまざまな面で活躍しました。
- ・（前略）これを飛鳥文化といい、法隆寺の釈迦三尊像などの仏像がその代表です。また法隆寺の建物も、火災にあって再建されていますが、聖徳太子が建てた当時の姿を残しているといわれています。これらは、主に渡来人の子孫によって造られましたが、南北朝時代の中国や、さらに遠くインドや西アジアなどの文化の影響も受けています。

『社会科 中学生の歴史』では渡来人は古墳時代の節においてのみ解説され、記述内容も『新編 新しい社会 歴史』と大差はない³¹。『中学社会 歴史』においても古墳時代の節での解説内容は『新編 新しい社会 歴史』と変わらないが、渡来人についてはこの他に飛鳥時代についての節で、「蘇我氏が渡来人と結んだ」ことや、「渡来人によって仏教が信仰された」ことを記述する。

高校の日本史Bの教科書のうち『詳説 日本史B 改訂版』は、渡来人を古墳時代の節の「大陸文化の受容」という項で次のように記述する。

このような朝鮮半島や中国とのさかんな交渉の中で、より進んだ鉄器・須恵器の生産、機織り・金属工芸・土木などの諸技術が、主として朝鮮半島からやってきた渡来人たちによって伝えられた。

ヤマト政権は彼らを韓鍛冶部・陶作部・錦織部・鞍作部などと呼ばれる技術者集団に組織し、各地に居住させた。また、漢字の使用も始まり、埼玉県の稲荷山古墳出土の鉄剣の銘文などからも明らかのように、漢字の音を借りて日本人の名や地名などを書き表すことができるようになった。漢字を用いてヤマト政権のさまざまな記録や出納・外交文書などの作成に

当たったのも、史部などと呼ばれる渡来人たちであった。

さらにこの後、「蘇我氏は渡来人と結んで」、「飛鳥文化は、渡来人の活躍もあって百済や高句麗、そして中国の南北朝時代の影響を多く受け」、「百済からの亡命貴族の指導下に、九州の要地を守る水城や大野城・基肄城が築かれ、対馬から大和にかけて古代朝鮮式山城が築かれた」といった記述が見えるが、その次に渡来系氏族について言及されるのは高野新笠である。

『日本史B 新訂版』では、古墳時代の「大陸文化の摂取」という節において渡来人について説明するところの注で「渡来人は、のちには王の徳に化するために帰順した人の意味で「帰化人」とよばれた」との説明はあるものの、その他の渡来系氏族についての言及は『詳説 日本史B 改訂版』と大差なく、飛鳥時代の「中央では渡来人の知識を利用して財政機構を整備し」という記述の次に渡来系氏族について言及されるのは高野新笠である。

『新選 日本史B』においては、古墳時代の節の「大陸文化の摂取と渡来人」という項において渡来人を説明した後は、蘇我氏との結びつきや飛鳥文化の担い手として出てくるのみであり、高野新笠についての記述はない。

③教科書の記述の問題点

以上のように、教科書においては渡来系氏族について、主に古墳時代に先進的な文物をもたらした存在として記述され、その後は特殊技能の担い手として若干登場する程度であり、桓武天皇の生母が渡来系氏族出身であるということについて記述している場合も、唐突にその事実が述べられているだけである。

このような描き方には、2つの問題点がある。

1点目は、渡来系の人々について外国からやって来て先進的な文物をもたらしたということしか書かれていないため、定住し、世代を追うなかで日本社会をともに形成していった現代日本人の祖先であるという視点が欠如しているということである。そのため、近代国家の枠組みによって「日本人」と「朝鮮半島の国の人」という形で対置して捉えられてしまう可能性が高い。³²

2点目は、渡来系の人々の帰化や王権との関わりについての説明が十分になされていないことである。このため、人々が渡来してくることについてその文化的な側面ばかりが強調され、政治的な意味を理解することができない。そうすると高野新笠が桓武の生母であることの意味について考えることも、教科書だけでは困難である。

3. 渡来系氏族の政治的な意味

渡来してきた人々は、どのような政治的役割を担っていたのであろうか。ここでは、百済・高句麗が滅亡する7世紀後半に渡来した百済遺民や高句麗遺民を中心に考えていきたい。

①百済遺民

7世紀半ばの朝鮮半島では、高句麗・百済・新羅の三国が唐や倭国を巻き込んで、複雑な外交を展開しながら攻防した。唐と結ぶことに成功した新羅は660年に百済を滅ぼし、663年には百済の復興を目指して朝鮮半島に出兵した倭の軍を白村江の戦いにおいて破った。さらに668年、唐・新羅の連合軍によって高句麗も滅ぼされた。

百済の復興が叶わないことが決定的となった663年以後、倭に滞在していた百済王善光などの百済の王族は蕃客として扱われ、さらに持統朝において「百済王」姓が賜与されて官人化していった。このことについて田中史生は、百済王は滅亡した「百済王権」を倭王権が取り込んだことを象徴する存在であるとし、さらに百済王氏の成立は、律令制の整備によって化内と化外を区別する必要性が生じたため、百済王を日本の姓秩序に組み込み、日本王権の中での「百済王権」の位置づけを律令法の枠組みで明確化しようとしたとする³³。

②高句麗遺民

では、高句麗遺民の場合はどうか。高句麗滅亡後、朝鮮半島では百済・高句麗の遺領支配をめぐる新羅と唐の関係は悪化し、戦争にまで発展する（羅唐戦争）。こうした状況の中で新羅や唐は、百済や高句麗の残存勢力を利用して倭へ「百済使」や「高麗使」を派遣した³⁴。また、現在の済州島に所在した耽羅も、それまで臣属していた百済が滅亡したことから倭に何度も遣使し³⁵、それに対して耽羅王への授位も行われた³⁶。

しかし、新羅から高句麗王として冊封され、朝鮮半島の金馬渚において高句麗王権を維持する形をとっていた安勝は、683年に新羅の冠位と姓を与えられ、首都慶州へ移住させられて新羅の貴族層に取り込まれる³⁷。これによって日本は、疑似的な朝貢国「高句麗」を失うことになったのである。この後は、690年代後半に南島との通交を積極的に行い、日本を中心とする中華を維持しようとした。しかし702年に多岐島で反乱がおり、それを制圧する中で南島は律令国家の版図となった。³⁸

こうした中、『続日本紀』大宝三年（703）四月乙未（4日）条に、

從五位下高麗若光賜王姓。

とあるように、高麗若光なる人物への王姓賜与が行われた。若光については、『日本書紀』天智天皇五年（666）十月己未（26日）条に、

高麗遣臣乙相奄鄒等進調。〈大使臣乙相奄鄒・副使達相通・二位玄武若光等。〉

とある玄武若光と同一人物であろうと考えられている。さらに、藤原宮跡東方官衙北地区から出土した木簡に、「□□〔高麗_カ〕若光」（藤原宮木簡一三一六号）とあることから、若光は都に居住していたのではないかと考えられる。つまり、高句麗からの使節として倭に派遣された人物がその後も日本に滞在し、都に居住する高句麗系の人々を代表するような人物であったために「高麗王」とされたということであろう。この「高麗王」は、「百済王」の場合と同様、疑似的に日本国内に維持された高句麗の王権ということになる。³⁹

以上をまとめると、高句麗や耽羅の王権を従える体裁をとることができなくなり、また南島を制圧して国内に組み込むことで、南島以外に化外の国を従える必要が出てきたことから、日本は703年、国内に疑似的に高句麗の王権を復活させ、従える体裁をとるべく、高麗若光に王姓を賜与したと考えられる。⁴⁰

このように、渡来系氏族は滅亡した外国王権を疑似的に体現し、日本の小中華意識を満たす役割を果たした。そして百済系の渡来系氏族出身者を生母に持つ桓武は、百済王権を象徴する百済王氏を「朕が外戚」とすることで、日本の天皇家のみならず、百済の王家をも引き継ぐ存在であ

るとすることで権力を確立しようとしたと考えられる。

4. 渡来系氏族を素材とした授業

では以上を踏まえて、渡来系の人々への理解を深化させつつ、近代国家の枠組みに縛られない歴史像を構築するような授業実践について考えてみたい。

《目標》

- ・ 渡来系の人々が古代国家において果たした役割について、先進文化の移入以外の政治的な側面（百済王氏の存在など）を考えさせることにより、古代国家の帝国性を理解させる。
- ・ 桓武天皇の政策について、「新王朝」という視点から解釈し、その過程で百済王氏との関係について考えさせる。
- ・ 渡来系の人々がともに日本社会を形成した現代日本人の祖先であるということを理解させる。

《方法》

以下の問いについて、教科書や図書館の文献などを用いて、グループで資料を読み解きながら議論し、発表する。教員は発表内容に応じてコメントする。

《問い》

- ① 渡来系の人々がもたらしたのものには、どのようなものがあるのだろうか？
- ② 渡来系の人々は、なぜ渡来してきたのだろうか？
- ③ 「百済王」や「高麗王」と呼ばれる人々が古代の日本にいたことには、どのような意味があるのだろうか？
- ④ 桓武天皇は「新王朝」を意識したとされるが、それはどういうことだろうか？
- ⑤ 桓武天皇が百済王氏を「朕が外戚」としたことには、どのような意味があるのだろうか？
- ⑥ 渡来系の人々は、平安時代以後、どうなっていったのだろうか？

※桓武朝における百済王氏の位置づけは難易度が高いため、生徒の状況に応じて問いから外す。

※渡来系の人々を単に「外国人」とみなすような意見については、「その後どうなっていったか」ということを考えてみるように促す。

《資料》

資料1 年表1 渡来系の人々の活躍

471	稲荷山古墳出土鉄剣に刻まれた「辛亥年」
538 or 552	仏教公伝
587	蘇我氏が物部氏を滅ぼす
623	鞍作鳥により、法隆寺金堂釈迦三尊像完成
665	亡命百済人の憶礼福留・四比福夫らの指導により、大野城築城

資料2 年表2 東アジアの国際関係

4世紀後半	高句麗の南下と百済や新羅への圧迫
660	百済滅亡
663	白村江の戦い
668	高句麗滅亡
680～690年代	百済王氏の成立
703	高麗若光に王姓賜与

資料3 年表3 桓武「新王朝」

770	光仁天皇即位
781	桓武天皇即位
784	長岡京へ遷都
790	桓武天皇、百済王氏を「朕が外戚」とする
794	平安京へ遷都
797	坂上田村麻呂、征夷大將軍に

資料4 天皇家 系図

天智天皇～嵯峨天皇に至る天皇家の系図

資料5 天皇の「ゆかり」発言

1の②で掲げた、記者の問いと天皇の発言

資料6 参考文献1 『新撰姓氏録』にみえる渡来系氏族

「815年に成立した『新撰姓氏録』は、平安京と畿内居住の1,182氏の氏族の系譜を掲げるが、そのうち諸蕃（渡来系）は326氏で、全体の3分の1を占めている。記録に残ることの少ない一般庶民層も含めて、古代の日本社会に渡来系の人々が広範に存在した事実が読み取れるのである。」⁴¹

資料7 参考文献2 関晃『帰化人』

1の③で掲げた関晃の言葉

おわりに

本稿では、渡来系氏族を素材として古代国家のあり方を理解し、さらには歴史上の出来事について近代国家の枠組みで解釈することを避けながら、現代との結びつきを考察する歴史教育のあり方を模索した。

歴史は、時の権力者や権力を簞奪せんとする者によってしばしば恣意的に利用される。歴史教育において学問的に検証された方法論によって史実を解釈する力を涵養することで、生徒は社会への責任を負いながら現代社会のあり方を相対化して捉えることができるようになって考えられ

る。だとするとこうした授業実践は、自国第一主義やポピュリズムが蔓延する世界に対峙する市民を送り出すことにつながるのではないだろうか。

参考文献

- ・ 大津透「解説」（関見『帰化人』講談社学術文庫、2009）
- ・ 柿沼亮介「律令国家形成期における対外関係と日本の小中華意識」（『日本史攷究』41、2017）
- ・ 柿沼亮介「東アジアからみた高麗郡建郡」（高橋一夫・須田勉編『古代高麗郡の建郡と東アジア』、高志書院、2018）
- ・ 柿沼亮介「国境線の変遷から近代国家の輪郭を探究する歴史教育 ―アルザス・ロレーヌ地方を素材として―」（『早稲田教育評論』33-1、2019）
- ・ 加藤謙吉「漢氏と秦氏」（荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係1 東アジア世界の成立』吉川弘文館、2010）
- ・ 塩川伸明『民族とネーション』（岩波新書、2017）
- ・ 関見『帰化人』（講談社学術文庫、2009、1956初出）
- ・ 瀧川政次郎「革命思想と長岡遷都」（『法制史論叢第二冊 京制並に都城制の研究』角川書店、1967）
- ・ 田中史生「「王」姓賜与と日本古代国家」（『日本古代国家の民族支配と渡来人』校倉書房、1997、1994初出）
- ・ 「「帰化人」論新考」（『日本古代国家の民族支配と渡来人』校倉書房、1997）
- ・ 西嶋定生「序説―東アジア世界の形成―」（『岩波講座世界歴史』第4巻、岩波書店、1970、のち、西嶋定生著・李成市編『古代東アジア世界と日本』岩波現代文庫、2000に再録）
- ・ 平野邦雄「帰化人と渡来人」（『帰化人と古代国家《新装版》』吉川弘文館、2018、初出は「記紀・律令における“帰化”“外蕃”の概念とその用例」『東洋文化』60、1980と「日朝中三国関係論についての覚書」『東京女子大学比較文化研究所 紀要』41、1980）
- ・ 丸山裕美子「帰化人と古代国家・文化の形成」（『岩波講座 日本歴史』第2巻、岩波書店、2014）
- ・ 森公章「『帰化人と古代国家』を読む」（平野邦雄『帰化人と古代国家《新装版》』吉川弘文館、2018、初出2007）
- ・ 吉川真司「百済王氏と河内国交野郡」（枚方歴史フォーラム「百済王氏とその時代」資料集、2018年3月3日）
- ・ 吉田孝『日本の誕生』（岩波新書、1997）
- ・ 吉田孝・大隅清陽・佐々木恵介「九一一〇世紀の日本 ――平安京」（『岩波講座 日本通史』第5巻、岩波書店、1995）

注

- 1 South Tyrol Museum of Archaeologyにて2019年4月2日～11月17日にかけて開催。2019年6月29日に観覧。
- 2 Konrad Celtis (1459～1508)。神聖ローマ帝国における代表的な人文主義者の一人。「全ドイツを遍歴して各地に人文主義者の組織をつくり、人文主義の普及と発展に貢献した。愛国主義的でゲルマン古代を理想の時代とし、ドイツの古書を収集して、10世紀の女流詩人ロスウィータの作品なども発見した。」（『世界大百科事典』、平凡社）
- 3 [塩川 2017] p. 44～p. 46
- 4 アルザス・ロレーヌ地方を素材に、同様の問題を生徒に考えさせることを目指したのが[拙稿 2019]である。

- 5 典拠とされる『万葉集』の「初春令月、気淑風和」については、漢籍である『文選』を踏まえていることも指摘されている。
- 6 西嶋定生は、漢字文化・儒教・律令制・漢訳仏教を共有する古代の中国・朝鮮半島・日本・ヴェトナムにおける文化圏と政治・外交システムが一体になった自己完結的世界を「東アジア世界」とした。〔西嶋 1970〕
- 7 渤海使や朝鮮通信使などの外交使節と日本の貴族や文人層などの間で漢詩の応酬が行われたことはよく知られる。
- 8 高野新笠は和乙繼の娘であり、『続日本紀』は和乙繼について、「百済の武寧王の子孫」であるとする。（『続日本紀』延暦八年十二月条付載明年正月壬子条）
- 9 785年の冬至の日、桓武は長岡京の南郊の交野で「天神」（昊天上帝、天帝）を祀り、さらに2年の冬至にも同様に交野で「天神」を祀った。（延暦四年（785）十一月壬寅（10日）条、『続日本紀』延暦六年（787）十一月甲寅（5日）条）これは冬至の日に皇帝が都の南郊に壇を築いて天を祀った中国の郊祀にならったものであったが、中国ではこの際に王朝の初代の皇帝を配祀するのが慣例であったのに対して、桓武が配祀したのは父の光仁であり、中国の王朝交替になぞらえて、新しい王朝が始まったことを示そうとしたものと考えられる。（〔瀧川 1967〕、〔吉田・大隅・佐々木 1995〕 p. 8）
- 10 『続日本紀』延暦九年（790）年二月甲午（27日）条
- 11 797年、桓武天皇は百済王氏の忠誠をたたえ、課役と雑徭を永久に免除する勅を下した。（『類聚三代格』卷十七・延暦十六年五月二十八日勅）
- 12 〔吉川 2018〕 p. 14
- 13 2001年12月18日、皇居・宮殿「石橋の間」において行われた記者会見。宮内庁ホームページ（<http://www.kunaicho.go.jp/okotoba/01/kaiken/kaiken-h13e.html> 2019年9月25日閲覧）より。
- 14 『朝日新聞』2001年12月23日付朝刊

（1面）

天皇陛下は23日、68歳の誕生日を迎えた。これに先立って記者会見し、深刻化する経済情勢が国民生活へ与える影響を案じ、この1年を振り返った。日韓共催のサッカーワールドカップ（W杯）との関連で、人的、文化的な交流について語る中で「韓国とのゆかりを感じています」と述べた。「残念な」歴史にも触れ、両国民の交流が良い方向へ向かうよう願う気持ちを示した。（4面に発言要旨など）

W杯の共同開催国、韓国に対する関心や思いを問われ、陛下は、同国からの移住者らが文化や技術を伝えたことに触れ「私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じています」と語った。

一方、「残念なことに韓国との交流はこのような交流ばかりではありませんでした」と語り、「このことを私どもは忘れてはならない」と述べた。さらに過去を「正確に知ることに努め、個人個人としての互いの立場を理解していくことが大切」とし、W杯を通し「両国民の間に理解と信頼感が深まることを願っております」と話した。

経済情勢の深刻化に触れ「失業率も高まり、国民の暮らしに大きな影響が生じていることを深く案じています」と話した。戦後の復興を例に、経済情勢など日本が抱える問題を「国民が必ずや乗り越えていくものと期待しています」と語った。

皇太子ご夫妻の赤ちゃんについては「健やかに育っていくことを願っています」と喜んだ。

（4面）

天皇陛下が日韓交流への思いなどを語った記者会見について、歴史学者らに聞いた。（1面参照）

○関係を気遣い人間的な感想

『徳川義寛終戦日記』などを監修した御厨貴・政策研究大学院大学教授（日本政治史） 韓国とのゆかりや様々なレベルの交流を振り返る端的な例として『続日本紀』を引用されたのだろう。百済の武寧王と皇室とのゆかりにふれたくんだりはやや踏み込んだ印象で、色々と意図を探る向きもあるかもしれないが、一言一句言挙げしたり政治的意味を読み込んだりするべきではない。日韓関係を気遣いながら、象徴天皇の枠内で正直な人間的感想として述べられたとみるべきだろう。

○陛下みずから言及意味深い

『帰化人』などの著書のある上田正昭・京大名誉教授（古代日本・東アジア史） 桓武天皇の勅を奉じて編集された『続日本紀』は、桓武天皇の生母であった高野新笠が、百済の武寧王の子孫であったと伝え、百済の建国神話を併記している。歴史学では古くから注目されてきた記述だが、陛下みずから言及されたことはきわめて意味深い。そうした人的交流ばかりでなく、あわせて不幸な関係を忘れてはならないとの指摘も重要である。

○両国の歴史の再認識に熱意

『皇室の伝統と日本文化』などの著書のある所功・京都産業大日本文化研究所所長 陛下のお言葉には、日本と韓国の関係を正確に再認識したいという熱意、覚悟を感じる。人と人、国と国との関係は事実の積み重ねでできあがっていく。ともすると韓国を植民地化して以降のことだけで語られがちな日韓関係を、歴史的事実を正確に伝えることで、千年以上の長い歴史のなかでお互いの関係をとらえ、相互理解と友好を深めあっていききたいというメッセージではないだろうか。

○具体的な言及、意外な感じも

天皇家に関する著書のある秦郁彦・日本大教授（日本近代史） 天皇陛下ご自身が天皇家のルーツに朝鮮半島がかかわっていると言及されたのは初めてではないか。韓国からもたらされた文化について具体的にお話しされており、意外な感じもする。W杯開催を前に、天皇陛下下の訪韓が実現せず、大変気を使われているという印象を受けた。また、教科書問題、靖国神社問題などで反日感情が高まったことを背景に低姿勢で臨もうとする小泉内閣の意向も反映しているのではないか。

○日韓友好へのメッセージ

『ミカドの肖像』などの著書がある作家の猪瀬直樹氏 天皇家が百済と深いかわりがあるということは、既に歴史的事実として広く知られていることだ。ただし、日本と韓国が東アジアの同じ地域で文明を共有してきたという歴史の意味を強調したことは意義があることだと思う。W杯を控えたこの時期に公言したのは、日韓の友好関係を築くための韓国側へのメッセージだろう。これが、韓国がいつまでも日本を敵対視する姿勢を改める機会になれば、と思う。

『産経新聞』2001年12月23日付朝刊

天皇陛下は二十三日、六十八歳の誕生日を迎えられた。これに先立ち記者会見に応じ、今月一日に皇太子ご夫妻の長女、敬宮愛子さまが誕生されたことについて「母子ともに健やかな様子に安堵しつつ、私どもが子供たちと過ごした遠い日々のが思い出されました」と述べられた。

この一年の印象深い出来事を問う質問には、長引く不景気をあげ「戦後、国民が荒廃から立ち上がり、今日を築き上げてきたことを考えるとき、これらの困難を国民が必ずや乗り越えていくものと期待しています」と述べられた。さらに宇和島水産高校の実習船「えひめ丸」事故や大阪府の池田小校内児童殺傷事件、米中枢同時テロなどに触れ、えひめ丸事故については「遺族や、学校関係者の気持ちはいかばかりかと察しています」と案じられた。

一方、「うれしいこと」として、野依良治・名古屋大大学院教授のノーベル化学賞受賞と、イチ

ローラ日本選手の米大リーグでの活躍を挙げられた。

来年開かれるサッカーのワールドカップに関して、共同開催国の韓国への思いを問う質問には「私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じています」と述べられた。

- 15 『朝日新聞』2001年12月24日付朝刊、『毎日新聞』2001年12月25日付朝刊、『産経新聞』2001年12月25日付朝刊。

このうち『産経新聞』は、韓国専門記者の黒田勝弘による以下のような記事を掲載した。

韓国の各紙は二十四日、日本の天皇陛下が誕生日会見で発言された内容を「皇室の朝鮮半島との血縁関係に初めて言及」と大々的に報じ、強い関心を示している。

各紙とも韓国の学者の意見として「文献的にはすでに知られていたことだが、天皇自らの発言としては異例だ」といった声を紹介しながら「教科書問題やW杯サッカー共催などを念頭に日韓関係改善を希望する心情を述べたものだろう」と一致した見方を伝えている。

天皇陛下の発言は、「桓武天皇（七八ー八〇六年）の生母が百済の武寧王の子孫であると続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じています」と述べたものだが、韓国ではマスコミを中心に、「日本の皇室のルーツは韓国」ということを日本が初めて公式に認めた、といった受け止め方で歓迎している。

各紙は一面のほか特集まで組んで詳しく報道しているが、学者たちは「日韓双方の学界では昔からいわれてきたことで騒ぐことではない」「日本が古代史を余裕をもってみられるほどに自信を持ったということだ」など冷静な意見を寄せている半面、新聞は「全日本が沈黙してきた王室のルーツ／日王が明らかにしたのは意外」（朝鮮日報）などと興奮気味だ。

また天皇陛下が皇太子時代から韓国に関心が高く、以前から韓国訪問を希望されてきたとし「韓国でのW杯サッカー開幕式への出席が難しくなっていることを考慮し、日韓の友好関係を期待する個人的メッセージといえる」（韓国日報）とする解説もある。

古代の日本と韓国（朝鮮半島）の関係については、韓国側が先進文化を日本にもたらしたとする優越感から韓国では関心が高い。このため一九八四年の全斗煥大統領訪日の際、昭和天皇が六、七世紀ごろの日韓古代史に触れ「わが国は貴国との交流から多くのことを学びました」と述べたときも「韓国が日本文化に与えた寄与を日本が初めて公式に認めた」として歓迎された。

また一九八〇年代前半、皇太子殿下（現陛下）の韓国訪問計画が話題になったときも、「皇室の里帰り」として百済の史跡訪問などを期待する声が出されている。

ただ、今回の天皇陛下の古代史発言を伝える韓国マスコミは一部を除き朝鮮日報や中央日報、MBC放送など多くが「天皇」という正式呼称を使わず依然として、格下げの意味で「日王」と伝えている。

- 16 『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』『日本経済新聞』『産経新聞』ともに2002年1月15日付朝刊
- 17 「渡来人」や「帰化人」といった用語の問題については後述する。
- 18 大韓民国においては「朝鮮」という語は歴史用語や固有名詞以外では用いられず、また朝鮮民主主義人民共和国では「韓国」という語は用いられない。その意味では、「朝鮮」も「韓国」も中立的な表現とは言えないが、日本語では「朝鮮」の語で朝鮮半島全体のことを表す用例は多いが、「韓国」という語に同様の意味を持たせることは少ないように思われる。いずれにしても、日本列島に渡来して世代を重ねた高野新笠を「韓国人」とするのは正確な表現ではない。
- 19 [関 1956] p. 12
- 20 「われわれが帰化人という場合には、はじめに渡来したその人だけでなくその数代のちの子孫までを含める。それはやはり帰化人としての特殊性が、そのくらの世代の間は失われないで残って

おり、その特殊性にこそ歴史的な意味が認められるからである。日本に渡来する人の数が問題にならないほど少なくなり、しかも前からの帰化人がその特殊性を失ってゆくのが、だいたい平安時代の初期なのである。」[関 1956] p.9

- 21 関は『帰化人』において、この言葉を載せる「序論」に先立つ「はしがき」の冒頭において、「古代の帰化人は、われわれの祖先だということ、日本の古代社会を形成したのは主に彼ら帰化人の力だったということ、この二つの事実が、とくに本書ではっきりさせたかったことである」([関 1956] p.3) とも述べている。
- 22 [吉田 1997] p.81～p.84、[森 2007] p.311～p.313など。
- 23 [丸山 2014] p.134～p.135
- 24 [大津 2009] p.232
- 25 8種のうち2種については「帰化人」を併記する。
- 26 単純に「帰化人」は古い表現、「渡来人」は新しい表現、というわけではなく、岩波講座においては、1994年刊行の『岩波講座 日本通史』第3巻の和田萃論文の題目は「渡来人と日本文化」であるが、2014年刊行の『岩波講座 日本歴史』第2巻の丸山裕美子論文の題目は「帰化人と古代国家・文化の形成」である。さらに、丸山論文と同じシリーズの『岩波講座 日本歴史』第1巻（2013年刊行）の菱田哲郎論文には、「渡来人と王権」の節が立てられている。それぞれの研究者の考えや出版企画に応じてその都度、用語が選択されているのが実情である。
- 27 [平野 2018] p.1
- 28 [平野 2018] p.6～p.9
- 29 [田中 1997] p.201～203
- 30 本稿では、これらの用語をめぐる論争で様々な意味が付随してしまっている「渡来人」「帰化人」という語を避け、「渡来系氏族」や「渡来系の人々」といった表現を用いている。
- 31 天平文化の節において「渡来人が伝えた仏教」という表現はあるが、「渡来人」の語が登場しているだけでそれ以上の説明はない。
- 32 こうしたことが、1で述べたような天皇の「ゆかり」発言をめぐる生徒の感想にもつながってくると考えられる。
- 33 [田中 1994]
- 34 百濟滅亡後の「百濟使」は671年に、高句麗滅亡後の「高麗使」は671、672、673、675、676、679、680、682年にみえる（『日本書紀』）。
- 35 661年～693年にかけて9回ほど遣使は行われ、そのうち王子や国王が来日している事例もある（『日本書紀』）。
- 36 『日本書紀』天武天皇二年（673）八月戊申（25日）条
 喚_レ賀騰極使金承元等、中客以上廿七人於京_ニ。因命_二大宰_一、詔_二耽羅使人_一曰、天皇新平_二天下_一、初之即位。由_レ是、唯除_二賀使_一、以外不_レ召。則汝等親所_レ見。亦時寒浪嶮。久淹留之、還為_二汝愁_一。故宜_二疾帰_一。仍在_レ国王及使者久麻藝等、肇賜_二爵位_一。其爵者大乙上。更以_二錦繡_一潤飾之。當_二其国之佐平位_一。則自_二筑紫_一返之。
 中国による冊封体制の秩序への挑戦を意味しかねない外国君主への授位を日本（倭）が行っているのは、他には白村江の戦いに際して余豊璋を百濟王として冊立したとされる事例しかみえない。
- 37 『三国史記』巻八・新羅本紀・神文王三年（683）十月条
 徵_二報德王安勝_一為_二蘇判_一。賜_二姓金氏_一。留_二京都_一。
- 38 [拙稿 2017]
- 39 なお、698年に建国し高句麗の後裔国と主張する渤海の大祚榮が、713年に唐から「渤海郡王」と

して冊立されたことで、日本は国内に高句麗の王権を維持することができなくなった。そのため「高麗王」はその後維持されることはなかった。716年に武蔵国に建郡された高麗郡の故地に現在も続く高麗神社には高麗若光を祖とするという伝承があり、若光を祀っているが、若光の「高麗王」氏が存続したことを示す同時代史料は存在しない。〔拙稿 2018〕

40 〔拙稿 2017〕

41 〔加藤 2010〕 p. 253